稲芋経について

智　谷　公　和

稲芋経は、Śālistamba sūtra,[1] Ḥph ago-pa sā-luḥi lijaṅ-pa shes-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo,[2] 十二縁起の要諦のみを中心に説く小経である。稲芋経では、世尊が稲の茎を見つつ、「縁起を見る者は、法を見る者であり、法を見る者は、仏を見る者である」[3]と言われて黙つてしまわれた。それを聞いていた舎利弗は、これを理解することが出来ないので、弥勒菩薩の所へ行き、おしえをこつた。それで弥勒菩薩が、舎利弗に縁起の原理「若見二因縁一、後即見レ法、若見二於法一、即能見レ仏」[4]を、「稲が生長して果実を結ぶに至る」事に、たとえて説いたものであり、これを広説したものである。稲芋経の説かれている縁起が生ずることを略図で示すと

- 縁起
  - 外的縁起
    - 因と相応する[5]
    - 縁と相応する[6]
  - 内的縁起
    - 因と相応する[7]
    - 縁と相応する[8]

以上のように縁起が説かれている。縁起 paticcasamuppāda は、[9]相互相依の関係（もちつもたれつの関係）であり、稲芋経は内的縁起の因と相応することを説明するのに十二縁起が説かれている。それは「此有故彼有、此生故彼生」[10]の論理がさきに出されこれに続いて、「無明によつて行あり、行によつて識あり乃至老死あり」と言う十二縁起が説かれる。十二縁起には従来から二つの解釈がなされているのは、よく知られている（伝統的解釈と論理的解釈）。佐々木現順博士によれば、二つの解釈はいずれも縁起を全体としてとらえたものではなく両者は一つのものの両面にすぎないと考えられ、そのことは立場を変えて時間の構造（因果性の様式と作用性の様式）の立場から言える、と言われている。すなわち因果性の様式（原因から結果の関係である、三世両重の因果）が、伝統的解釈の根拠となつており、作用性の様式（無実体性即ち静的実体のないこと）が、論理的解釈である。[11]稲芋経は、十二縁起のあらわれている（本質的な在り方）説明が多く説かれ、それらは、作用性の様式に基準をおいて考えることができる。[12]作用性の様式は大乗仏教の縁起観の基底となつたものと考えられ、因果性の様式はアビダルマ仏教で強調されたのである。稲芋経は「縁起を見る者は、法を見る」と言う原始仏教以来の思想の要諦のみをもつとも簡潔に示したものとしてもちいられるに至つた。

1　山田竜城『梵語仏典の諸文献』1959, 平等寺書店, p.108, に詳しく文献について解説があるが、その中に述べられていない復原梵語文献を上げると以下のごとくである。（稲芋経のサンスクリット原典は発見せられていないが復原梵本がある）。Buddhist Sanskrit Texts No. 17,『Mahāyana Sūtra Saṅgraha』Mithila Institute 1961, pp. 100–106.

2　チベット北京版 No. 876 (Vol. 34, 303–2–8～306–3–8)。他のチベット諸版ナンバーは略す。バーネットの稲芋経古写本発見によつて、古写本の埋没が AD. 719～791 とされているので、梵本から西蔵に訳されたのは八世紀末までと推定される。

3　大正 16, 819, 上『慈氏菩薩所説大乗縁生稲葦喩経』(No. 710)

唐、不空訳。これと同じ文句が、Majjhima-Nikāya I (PTS. pp. 190-191) に見える。

4　大正 16, 823, 中『仏説大乗稲芋経』(No. 712) 失訳、これは敦煌出土である。他に四つ漢訳稲芋経類（大正、No. 708～711）があるが説明は略す。これら漢訳諸経でいえることは、呉の支謙（AD. 220～253）より、約七五〇年間にわたる宋時代までの訳出から見ても、支謙当時はかなり重用な経典とせられていた。歴代三宝記や開元録にも支謙の自注があったことを記す。

5　これを説明するのに「種子から芽～花から果」のように種子があるから芽が生じるこのように種子が成長して花から果が出来ることを、「外的縁起の因と相応ずる」という。「外因縁法因相応、所謂従レ種生レ芽～従レ花生レ実。」大正 16, 824. 上。

6　これを説明するのに「六界（地、水、火、風、空、時）が集まるから外的縁起の縁と相応する」としている。例えば六界の一つである地界は種子を保持するし、水界は種子をうるほすことなどを、いうのである。「外因縁法相応義、謂二六界和合故一～非二自性生一、非二無因而生一。」大正 16, 824. 中。六界の中で時界というみかたは、稲芋経の特色であり、阿含経典群にはない。『仏説大乗稲芋経』に簡単な説明しかなく「時則能変二種子一」（大正 16, 824, 中）と、あって、時界は種子を変易させることである。他の漢訳諸経典も、チベット文、サンスクリット文も同じように簡単な説明であるが、思想的には注意したい。

7　これを説明するのに「十二縁起によるから内的縁起の因と相応する」としている。「内因縁法因相応義、所謂始レ従二無明一縁行～如是有レ生故老死得有。」大正 16, 324, 中。三枝充悳『初期仏教の思想』1978, 東洋哲学研究所。この本に、阿含の縁起について（pp. 482～591）に詳しい資料と説明があり、その中で十二縁起説（pp. 583～586）が述べてあつて、「無明で始まる型の十二縁起説は最後に完成したものである」と言われている。

8　これを説明するのに「六界（地、水、火、風、空、識）が集まるから内的縁起の縁と相応する」としている。「水界は身をあつめることをなすものをいう」。「内因縁法相応事、為二六界和合一故。～為レ令二此身而聚集者一、名為二水界一。～」大正 16, 824 下。

9　縁 pratyaya は、prati＋√i＋aya を語根とする名詞であり、belief. Confidence という意味をもつていた。prati＋√i, pratyeti, to go forward, to come back, の語源が示すように相互に相写し合うということである。佐々木現順『阿毘達磨思想研究』1972, 清水弘文堂、p. 41. 縁起には相互相依の関係性と共に avadāna, nidāna の意味もあり物語或は歴史的背景の意味に用いられる場合もある。佐々木現順「日常生活に生きる仏教語」（『宗教』）1979, 7, 1. 教育新潮社、pp. 12～15.

10　大正 16, 824, 下。これと同じ文句が、Majjhima-Nikāya, ii, 32, Saṃyutta-Nikāya, ii, 28, 等に見られる。

11　佐々木現順『仏教における時間論の研究』1924, 清水弘文堂 pp. 63～115. 舟橋一哉『原始仏教思想の研究』pp. 76～77.

12　作用性の様式によれば十二縁起はエネルギーそのものと考えられ河の流れのようにたえず動ごいているもの即ち静的実体のないものである。「十二因縁～如二河駃流間無二絶時一」。「如二河駃二流間一則無レ絶」大正 16, 818, 上。

（大谷大学大学院）